

Ultrastructural Aspects of the Liver and its Disorders 改訂第2版

谷川 久一 久留米大学教授

日本大学教授

志 方 俊 夫

日本人にとって語学のハンディキャップが大きいことはいろいろな機会に繰り返し、繰り返し痛感させられることであるが、医書の中でも英文で書かれていればいかに大きく世界の医学の進歩に貢献し、またその著者も大きく評価されるだろうと考えられる場合が少なくない。

その点、谷川さんは昔から彼のこの本の故に——と申し上げると失礼かも知れないが、私は彼の卒業した旧制中学の数年先輩であったということでお許しを願うなら——世界的に有名である。

日本では教科書なり、単行本なりを書いたからといって、特にその研究者が高く評価されることはなさそうである。私などはむしろ研究者が研究能力のあるうちは教科書を書くべきでないという信念を持っており若くして教科書を書く人をむしろどうかとさえ考えている。

しかし、どうも国際的に、研究者がその人なりの評価を得るためにはやはりモノグラフを書くことが一番早道のようなものである。それも英語で書かねばならない。多くの日本の研究者がこのような語学のハンディキャップのために実力以下に評価されているのに対して、谷川さんは彼のこの有名な本のためにその実力なみに世界的な評価をされているといえよう。

そして、日本人が英語でモノグラフを書く時やはり最初にねらうのはアトラスに近い写真の多い本がよいということは、彼の本の成功がよく示している。これは英文が少なくてすむこと、また日本で売の場合も日本人の不得意な英文が少なく、日本人も買いやすいという利点はまさに彼および医学書院のねらい通りになったのである。

肝臓に関する電顕の本は谷川さん

の以外にも Cossel の本、その他があるが、谷川さんの本以外はかすんでしまっており、彼の本ほど有名ではない。また同じ医学書院から藤田さんが関係して出している肝臓の走査電顕のアトラスの評判は知らないが、私の見たところではこれもすばらしい本のように見える。

さて、谷川さんの本は10年をへて第2版として若干の改訂の上に出版されたものであるが、今回は走査電顕の写真が加わってより完成に近いものになった。しかし、一つやはり欠点といえるのは彼自身も自覚しているように、最近目覚ましい進歩をした酵素抗体法による電顕写真の欠除であろう。この方法は、たとえばウイルス関連抗原の証明には欠かせないものであるからである。また肝臓の種々な酵素の電顕組織化学の写真も更に加わってもよいものであろう。それはともかくとして、現在の時点のこの領域でこの本が一番よくまとまったよい本であることは間違いなく、心から彼の第2版出版に祝福を送りたい。そして、更に第3版、第4版と完成されたものに近づいてゆくことを祈っている。

B 5 頁370 図9 写真233 1979

¥11,000 円300 <医学書院刊>